

前号作品短評A 〈小野澤〉

●睦月なかば義兄あにのコロナ感染が姪と吾とに 監禁七日

河村郁子

姪と吾とに強いるものとなった、それが監禁七日か。

評者も、この十月に感染した。クリニックの注意に、外出自粛が推奨される期間として、（発症日を○日目として）五日間経過するまで、かつ五日目まで症状が続く場合は、熱が下がり痰や喉の痛みが軽快し、二十四時間程度経過するまで、が記された。これに、同居する方も五日間までは、じしんの体調に注意すること。七日目までは発症する可能性があること、が含まれていた。監禁七日は、このような期間か。

一連体言止めも多く、全体にキビキビとした運び。このあとで、（義兄の転倒を起こそうとして）腰椎圧迫骨折になる（三首目）。

入院中から、また退院後もリハビリに励んだ、

自らの身は自らが守るべき来しかた今までなかりし日常

来しかた今までなかりし日常、という表現が丁寧で独特、いい。

ところで腰椎圧迫骨折、リハビリ、十年日記、体育会系ひとり合宿（これは比喻）、タニタ体重

計、三年日記、と歌は順に項目的でもある。振り返っている。

八十歳代最後の一年の貴重なり 先づは十年日記のしめくり

評者も七十五歳となって、五年（連用）日記の最終年となった。次を三年日記にしようとしている作者にかさなる思いはある（一連最後）。

●さわやかや讃岐の衆の心意気

新野祐子

さわやか、はさっぱりとして気持ちのよさま、秋の季語である。讃岐の衆をみちびく言葉でもある。（香川の）句友が登場するところ。その最初の三句は、手をつくしてする紹介、か。善人、善人のあかし、という入り方である。善人という言葉で、ブレヒトの寓意劇「セチユアンの善人」を思い出した。

この句につづいての句、その場所は「（錦繡の）蔵王（…）」とタイトルにある通りか。描写するに案外むつかしい雲海。登山シーズンだから、雲海は夏の季語になるという。その次の句も含めて場所は蔵王か。雲海の広がり、火口湖の深み、そこにあるもの、そこにしかないもの。力業である。

雲海のかくまで広き眺めかな

火口湖の底に秋思を見つけたり

山寺、茂吉館の句がつづく。全体に臨場感、即興性のある句である。そのなかで、この句がいい。ましら酒（猿酒）が秋の季語。ましら酒にも不思議はある。

險谷より湯気立つ不思議ましら酒

●順ぐりに古稀といふもの迎ふれば身軽にならむと頭めぐらす 布宮慈子

下句「身軽にならむと頭めぐらす」だが、そのひとつがここでは小屋の片づけか。

四年は触れていなかった小屋、その中。土間でもあるそこに並んでいる漬物ら、果実（ハーブ）酒の類い。そのなかの弟切草酒、こんな歌になる。

ありし日に家の誰かが飲む様を見しことあらず弟切草酒

弟切草は、鷹匠たかじょうの兄弟の物語に由来するという。ここでは鷹の傷の特効薬として家伝の秘密になっていて、弟が別の鷹匠の家の娘に恋をして、この家伝の秘密をその娘に洩らしてしまった。それに激怒した兄が弟を切り捨てるという、そういう伝説である。

漬物小屋でもあった小屋（物置）の片づけをしたことがあるので、よくわかるところがある。まとめでは、この歌か、

小屋とふは異界のごとし何もかも呑み込み隠し時間を止める

後段は、植え替えをしたナツメヤシ（棗椰子、果実がデーツ）の話。ヤシ科の高木（八首目）。

こちらにも身軽さがある。秋の日である。

秋の日にナツメヤシに留まりゐしトシボの身軽さ思ふしばらく

●秋日にもなれるその日々朝寒に昨日のわれがめざめるごとし

小野澤繁雄

「秋日」は一般的には「しゅうじつ」と読むが、短歌や俳句の短詩系では「あきび」と読ませることもある。秋の日を指す。季節が秋になってきたこの日ごろ、明け方のうすら寒さに新たな一日ではなく、昨日の自分のまま目覚めたような気分、と読んだ。スツと起きるのではなく、なにか錯覚したように布団の中でしばらく様々な考えが浮かんでゆつくり起きたのだろう。

昼までの雨が上がり出て出る秋日ホールに聴いているブラームス

こちらは、雨上がりに出かけて秋の一日をコンサート会場で過ごしている場面。聴いたのはブラームスの交響曲だろうか。なぜかブラームスには秋という季節がぴったりくるようだ。美しい一首に仕上がっている。

●老いのすなる白内障の手術をばわれもしてみむとてするなり

梅津純子

紀貫之の『土佐日記』の有名な書き出し「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」を下敷きにした歌。本歌取りに近いかもしれない。老人がするという白内障の手術を、自分

もしてみようと思つて手術するのである。ユーモアのある導入部だ。白内障の手術は簡単という人もいるし、そうたやすいものではないと釘を刺す人もいる。その迷いや悲壮感を振り払うように手術に臨んだ作者。とはいっても病院は事務的に事を進めるところであり、次の一首は如実にそのことを示している。

あな恐ろし手術説明同意書に失明といふ例までありて

白内障には退院日和と看護師は小暗き窓の雨に眼をやる

天気が変わるいほうがいい、そういうこともあるのだ。看護師のひと言ひと言が身にしみる場面である。白内障手術という一大事を前にして、作者にとっては内面をすどく見つめる体験となったのではないか。

己を客観視すること、時にはエスプリをきかして作歌する態度、多くを学ばせてもらった一連であった。